

『マーディ』での若きメルヴィル — (1)

— 喪失と幻滅 —

五十嵐 博*¹

Young Melville in *Mardi* — (1)

— Deprived and Disenchanted —

Hiroshi IGARASHI

Abstract

Melville's marriage in conjunction with his roving experiences in the Pacific became a backdrop for his third book, *Mardi*, which is the longest and most voluminous of his works. The plot, characters, and scenes of *Mardi* are for the most part fictitious and have some allegorical and symbolic meanings. The young writer's marriage provided a thematic basis for this allegorical romance, in which the protagonist vainly seeks a lost, ideal purity.

1. はじめに

ハーマン・メルヴィル (Herman Melville, 1819-1891) の第3作『マーディ — そこでの航海』 (*Mardi: and a Voyage Thither*, 1849) は、彼の全著作中で最も長い作品であり、前2作の『タイピー — ポリネシアの生活を垣間見て』 (*Typee; or, a Peep at Polynesian Life*, 1846) と『オム — 南海の冒険談』 (*Omoo: A Narrative of Adventures in the South Seas*, 1847) を合わせた以上の分量がある。単純に章数で比べてみても、後の『モービー・ディック — 鯨』 (*Moby-Dick; or, The Whale*, 1851) が135章までであるのに対して、『マーディ』は195章まで続く。

この長い作品を読み解くにあたり、まず『マーディ』執筆の背景にあるメルヴィルの結婚とその後の生活がどのようなものであったかを瞥見し、作品理解のための一助としたい。

1.1 結婚と執筆

処女作『タイピー』と第2作『オム』の出版により作家としての社会的認知を得たハーマンは、28歳の誕生日 (8月1日) を迎えた直後の1847年8月初旬に結婚した。相手は、処女作『タイピー』の献辞にその名が記されて

いるマサチューセッツ州最高裁判所長官レミュエル・ショー (Lemuel Shaw, 1781-1861) の一人娘エリザベス (Elizabeth Knapp Shaw, 1822-1906) で、彼女はハーマンの姉ヘレン (Helen) の友だちだった。

ハネムーンでニュー・ハンプシャー州からカナダのケベックにかけて3週間の旅行をした後、2人はニューヨーク州都オールバニー (Albany) 近郊の村ランシンバーグ (Lansingburgh) にあったハーマンの家で、ハーマンの家族と同居しながらの結婚生活に入ったが、1ヶ月後の9月末には、岳父レミュエル・ショーから金銭的援助を受けたハーマンが、弟のアラン (Allan Melville, Jr., 1823-1872) と共同で購入したニューヨーク市マンハッタンに住居にメルヴィル一家全員で引越した。そして、そこでハーマン夫妻、アラン夫妻、およびメルヴィル家の母 (Maria Gansevoort Melville, 1791-1872) と4人の姉妹 (Helen, Augusta, Catherine, Frances) が一緒に暮らすという大家族生活が始まった¹⁾。このマンハッタンでの同居生活は1850年9月まで3年間続いた。

『マーディ』は、このマンハッタンの住居で書き進められ完成されたのであるが、マンハッタンに越して来て間もない頃、メルヴィルはロンドンの出版者ジョン・マレー (John Murray) 宛てに、次のような手紙 (1847年10月29日付) を書いている。

2008年6月9日受理

*1 東海大学海洋学部清水教養教育センター非常勤講師 (The General Education Center, Shimizu, The School of Marine Science and Technology, Tokai University)

「私は南海での冒険について、新たな本を執筆中です（『オムー』からの続きですが、まったく別の独立した物語です）。この新しい作品には全く新しいシーンが展開され、比較的陳腐な題材を扱った前作よりもっと興味深いものになると思います…いつこの本が出版できるか、はっきりしたことは言えませんが、たぶん来春後半か、もしかしたら遅れて来年の秋、その頃までには確実に脱稿できているでしょう」。（I am engaged upon another book of South Sea Adventure (continued from, tho' wholly independent of, "Omoo")—The new work will enter into scenes altogether new, & will, I think, possess more interest than the former, which treated of subjects comparatively trite... I can not say certainly when the book will be ready for the press—but probably the latter part of the coming Spring—perhaps later—possibly not until Fall—but by that time, certainly.)²⁾

このように第3作を執筆中である旨を書いた後に続けて、メルヴィルは原稿料に言及し、「やむにやまれぬ事情から、私は著作業務を金銭的視点から見ざるを得ません」（circumstances paramount to every other consideration, force me to regard my literary affairs in a strong pecuniary light.）³⁾という文言でこの手紙を締めくくっている。

父親（Allan Melvill, 1782-1832）が事業に失敗して早死にしたため、メルヴィル家は経済的に苦しい状況にあった。そして作家としてデビューしたとは言え、定期収入のないメルヴィルは、厳寒のマンハッタンで暖房代も節約しながら『マーディ』の執筆を進めた。妻のエリザベスは「47年の冬と48年の冬、彼は著作に励んだ。火のない部屋で、衣類に包まって『マーディ』を書いた」（Winters of '47 & '48 he worked very hard at his books—sat in a room without fire—wrapped up—wrote Mardi...）⁴⁾と書き残しているが、この時の執筆状況をメルヴィルは第7作『ピエール——曖昧』（*Pierre; or, The Ambiguities*, 1852）の中で、田舎から都会に出てきた青年作家ピエールに託して、以下のように描いている。

「ピエールは広範囲のものが凝集された作品の執筆に取り組んでいたが、2つの大きな動機から作品の速やかな完成を迫られていた。1つは、新たな真実を、嘆かわしいことにこれまで目を向けられていなかった真実を世間に伝えたいという燃え立つような欲求であり、いま1つは、彼の本が売れてお金を手にできなければ一文無しになるという恐れだった…極力節約するためピエールは暖房を買い足そうとしなかった…自分専用のストーブを持つべきだとイザベルは繰り返し主張したが、ピエール

は聞こうとしなかった…長靴を履いた上に鹿皮の靴を履き、通常のコートの上にシュルトウ外套を重ね着し、さらにその上にイザベルのマントを羽織った」。（Pierre was now engaged in a comprehensive compacted work, to whose speedy completion two tremendous motives unitedly impelled;—the burning desire to deliver what he thought to be new, or at least miserably neglected Truth to the world; and the prospective menace of being absolutely penniless, unless by the sale of his book, he could realize money... warned again and again to economize to the uttermost, Pierre did not dare to purchase any additional warmth... Often, Isabel insisted upon his having a separate stove to himself; but Pierre would not listen to such a thing... Over his boots are his moccasins; over his ordinary coat is his surtout; and over that, a cloak of Isabel's. —*Pierre*, Books XXI-XXII, pp. 283-301.）⁵⁾

メルヴィルの自画像とも言うべきピエールは、雪が降り始めて、その鈴の音が聞こえるようになって、感謝祭の祝日がやって来ても、クリスマスや新年を迎えても、自室に腰掛けて執筆し続けており、

「そうしたくても、今の彼には、人々を楽しませて、かつお金も入るような、浅薄で分かりやすく愉快的ロマンスを書くことはできなかった…ああ！毎日毎日衣類とコートに包まって寒さに震えながらいるなんて、これが、かつて世間に『熱帯の夏』を歌い上げたあの熱き若者なのか？」... would he, he could not now be entertainingly and profitably shallow in some pellucid and merry romance... Ah! shivering thus day after day in his wrappers and cloaks, is this the warm lad that once sung to the world of the Tropical Summer? —*Pierre*, Book XXII, pp. 305-306.)

とメルヴィルは結んでいる。

また、『マーディ』の中では、

「書いている間に私の頬は蒼ざめる。自分のペンが紙をひっかく音にぎくつとする…遠くの畑で穀物を刈る人の歌声が聞こえるが、私はこの独房で奴隷のように働き、気を失う…多くの君主たちがそうであるように、私は、作男よりも羨まれるべきような存在ではない」（My cheek blanches white while I write; I start at the scratch of my pen... in far fields I hear the song of the reaper, while I slave and faint in this cell... like many a monarch, I am less to be envied, than the veriest hind in the land. —*Mardi*, Ch. 119, p. 368.）⁶⁾

というふうには自らの執筆生活に触れている。

さらに、実家の母に宛てて書かれたエリザベスの手紙(1848年5月5日付)の文面からも、結婚1年目のメルヴィルの『マーディ』執筆状況を窺い知ることができる。

「もっと長い手紙を書くべきなのですが今日は清書でとても忙しくて時間をさけません。いろんな間違いもごめんなさい。作成途中の清書原稿と勘違いして紙を破ってしまいましたし…句読点がなければご自分で句読点を補ってください。というのは私が清書をする時には句読点を一切付けずにおいてハーマンの最終チェックにゆだねるからです。句読点なしで書くのに慣れてしまい句読点のことを常に考えることができなくなってしまいました」。(I should write you a longer letter but I am very busy to-day copying and cannot spare the time so you must excuse it and all mistakes. I tore my sheet in two by mistake thinking it was my copying... and if there is no punctuation marks you must make them yourself for when I copy I do not punctuate at all but leave it for a final revision for Herman. I have got so used to write without I cannot always think of it.)⁷⁾

経済的に苦しかったとは言え、作家メルヴィルには周囲の手助けがあった。生涯独身だった妹のオーガスタは彼の結婚前から、そして結婚後も彼の原稿の清書と校正を手伝った。結婚後は妻のエリザベスも手伝った。マンハッタンでの大家族生活の中で、冬は暖房なしで寒さに震えながらメルヴィルは自室で原稿を書き続け、それを妻のエリザベスと妹のオーガスタが清書しながら『マーディ』は完成されたのである。

1.2 死と隣り合わせの結婚

結婚を機に、メルヴィルに責任と経済的重圧がのしかかってきたことは想像に難くないし、そのことが執筆に何らかの影響を及ぼしたであろうことも容易に推察できる。『マーディ』の物語の中頃に、葬式と結婚式が隣り合わせで同時進行する場面が出て来るが、これを私たち読者はどう解釈すべきなのだろうか？

この場面に祭司が現れて、まず、死亡した青年ダイバーの葬式に顔を出し、

「[彼は] この悲惨なマーディのすべての苦難と罪悪から解放された…あなたがたは嘆き悲しむが、死せる者は生きている者より幸福である」([He] is exempt from all the ills and evils of this miserable Mardi! ... the dead whom ye deplore is happier than the living. — *Mardi*, Ch. 99, p. 301.)⁸⁾

と遺族に語りかける。それから祭司は、隣りで行われてい

る結婚式に行き、花で飾られた手かさを花嫁にはめ、花婿には花飾りの付いた重石を腰にぶら下げる。すると花婿はその重みで花嫁の方に身体を傾ける。最後に祭司は、「不安そうな表情の」(looked ill at ease) 2人を「背中合わせに」(back to back) 立たせて、

「新婦よ、花の手かせで汝を妻とし、新郎よ、その重石によって汝を夫とする。双方、生きて幸せになれ」(“By thy flowery gyves, oh bride, I make thee a wife; and by thy burdensome stone, oh groom, I make thee a husband. Live and be happy, both.” — *ibid*, p. 302.)

と言う。続けて、語り手の「私」は、

「しかしマーディのすべての婚礼が、このように行われたわけではない。重石や花の手かせのない結婚式もあり、そうした式は、微笑みとともにではなくて、涙とともに結婚を誓い、心から応じた人たちの間で行われた」(But not all nuptials in Mardi were like these. Others were wedded with different rites; without the stone and flowery gives. These were they who plighted their troth with tears not smiles, and made responses in the heart. — *ibid*.)

と語る。

死と結婚を表裏一体に捉えるこの場面を私たち読者はどう解釈すべきなのだろうか？私的側面から作家の心理に光をあててみて、メルヴィルは、死んで苦しみから解放されたいと願うほどまでに結婚による束縛と重圧をきつく感じていたのかもしれない、と推量すべきなのだろうか？あるいは、メルヴィル自身の結婚は愛の涙で誓われたものであり、心からの結び付きだったと推測すべきなのか？

本稿の目的は、メルヴィルの結婚とその後の生活がどのようなものであったのか、そしてそれがメルヴィルの作品形成にどのような影響を及ぼしたのかをつぶさに探ることではない。作家の私的側面から作品に光をあてることは、作品の客観的評価と普遍的価値に修正を施すことにはならないと筆者は考えるからである。太平洋を舞台とする放浪に加えて、結婚が『マーディ』執筆の背景の一つとしてあったという事実を認識するだけで充分である。作家の私生活や私的心理学を推量することと作品の客観的解釈および価値評価は別のものであると筆者は考える⁹⁾。

葬式と隣り合わせの結婚式の場面は、作品のストーリー展開の一環として捉えられるべきである。『マーディ』のストーリーの軸は、語り手でもある「私」が、美しい乙女イラー(Yillah)に出会い、彼女の保護者的存在の長老を殺して彼女を手に入れるが、ハネムーンのような日々を過ごした後でイラーは忽然と消えてしまい、「私」は失われた過去の幸福の幻影を探し求めて航海し続ける、という

ものである。こうしたストーリー展開の只中に挿入されているこの場面で描かれている結婚と表裏一体の死とは、結婚するまであった純潔の喪失を寓意していると解釈するのが論理的である。

1.3 本能に導かれて

暖房なしの厳寒のマンハッタンで執筆し続けるメルヴィルは、再びジョン・マレーに手紙（1848年3月25日付）を書き、第3作の執筆プランの方向転換を伝えて、次のように説明している。

「今こうしてあなたにお手紙をしたためているのは…私の方針変更をお伝えするためです。端的に言って、次に私が出す本は、本格的な“ポリネシア冒険ロマンス”となるでしょう…それは新しいもので、少なくとも独創的な作品です…物語は本当の話のように始まります。例えば『オムー』のように船の上で物語は始まりますが、そこからロマンスと詩情が広がり、波乱に富んだ、ある意味をもつ物語になります…我が本能は、ロマンスを出せと言っています。そして、言わせてもらえば、本能は預言者のようなものであり、後天的な知恵よりも良いものです。 (My object in now writing you... is to inform you of a change in my determinations. To be blunt: the work I shall next publish will in downright earnest [be] a “Romance of Polynesian Adventure”... It is something new I assure you, & original if nothing more... It opens like a true narrative—like Omoo for example, on ship board—and the romance & poetry of the thing thence grow continually, till it becomes a story wild enough I assure you & with a meaning too... My *instinct* is to out with the Romance, & let me say that instincts are prophetic, & better than acquired wisdom...)¹⁰⁾

『マーディ』は結局、英国ではジョン・マレーではなくて、別の出版者リチャード・ベントリー (Richard Bentley) によって1849年3月15日に出版されたが、この手紙は『マーディ』の核心部分を理解するために、つまり、この作品でメルヴィルが人間世界に対して提起したことの傍証として非常に重要である。なぜなら、メルヴィルはこの手紙の中で、「後天的知恵」が指示することよりも「本能」が命ずることの方を選択すると言っているからである。

マーディを巡る航海中に、最大量の発言をする哲学者ババランジャ (Babbalanja) は「後天的知恵」の代弁者であり、語り手の「私」である半神タジ (Taji) は「本能」の代弁者で、最終的に「私」タジは「本能」の命ずるままに行動する。したがって、ババランジャが選択するセレニア島 (Serenia) でのキリスト的愛の実践にではなく、セレニア島を含めたマーディ群島全体を拒否して探求を続け

るタジの選択に、『マーディ』のテーマと結論が隠されていることが分かる。

メルヴィルは『マーディ』の序文 (Preface) に、

「少し前に、太平洋での航海にまつわる物語を2冊出版したが、信じられないという反応が多方面で見受けられたため、今度は本当にポリネシア冒険ロマンスを書いて出してみ、フィクションが真実として受け止められないかどうかを見てみよう思った」 (Not long ago, having published two narratives of voyages in the Pacific, which, in many quarters, were received with incredulity, the thought occurred to me, of indeed writing a romance of Polynesian adventure, and publishing it as such; to see whether, the fiction might not, possibly, be received for a verity. — *Mardi*, Preface, p. xviii.)

と書いた。『タイピー』と『オムー』は、ノンフィクションとフィクションの混淆と言える作品だが、『マーディ』は、作者が自身の結婚を精神的素材にしているとは言え、架空の物語である。しかも、そこには「ある意味」が宿されている。

次項で、この寓意ロマンスを構成、プロット、および登場人物と彼らの言動から読み解き、『マーディ』の結論は何か、メルヴィルは一体何を言いたかったのかを解明していく。 — 続く

註

- 1) ハーマンの兄ギャンズヴート (Gansevoort Melville, 1815-1846) はこの時既に病死しており、一番下の弟でメルヴィル家の末っ子トーマス (Thomas Melville, 1830-1884) は16歳の時から船乗りとして海に出ていた。
- 2) Merrell R. Davis and William H. Gilman eds., *The Letters of Herman Melville* (New Haven: Yale University Press, 1960), p. 66.
- 3) *ibid.*, p. 67.
- 4) Jay Leyda ed., *The Melville Log* (New York: Gordian Press, 1969), p. 268.
- 5) 『ピエール』のテキストは Herman Melville, *Pierre; or, The Ambiguities* (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1971) を使用し、引用には編と頁数を付した。
- 6) 『マーディ』のテキストは Herman Melville, *Mardi: and a Voyage Thither* (Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1968) を使用し、引用には章と頁数を付した。
- 7) Eleanor Melville Metcalf, *Herman Melville: Cycle and Epicycle* (Westport, Conn.: Greenwood Press, Publishers, 1970), p. 54.
- 8) [] 内の語は筆者が補った。
- 9) D. H. ロレンス (D. H. Lawrence, 1885-1930) の『アメ

リカ古典文学研究』(Studies in Classic American Literature, 1924) は分析的, 論証的な文学批評ではなく, 彼の直感的認識と洞察, 推量を書き綴ったものであるが, 第10章「ハーマン・メルヴィルの『タイピー』と『オムー』」で, 次のように彼は書いている。

「25歳の時, 彼は家に, 母のもとに帰って来た…メルヴィルは帰郷し, 長い残りの人生に立ち向かった。結婚し, 求愛の歓びを味わい, そして幻滅の50年を過ごした。

彼は家庭に幻滅だけを感じていた。タイピー族はもういなかった。楽園はもうなかった。フェイヤウエイはもはやいなかった。母は恐ろしいゴルゴンで, 家は拷問箱のようで, 妻は欠点だらけだった。人生は恥辱のようなもので, 文字が読めるだけの俗物らからひいきにされて得た名声も不名誉なものだった」。

(At the age of twenty-five he came back to Home and Mother... Melville came home to face out the long rest of his life. He married and had an ecstasy of a courtship and fifty years of disillusion.

He had just furnished his home with disillusion. No more Typees. No more paradises, No more Fayaways. A mother: a gorgon. A home: a torture box. A wife: a thing with clay feet. Life: a sort of disgrace. Fame: another disgrace, being patronized by common snobs who just know how to read. — *Studies in Classic American Literature*, Penguin Books, 1971, p. 150.)

続けてロレンスは『ピエール』に触れながら, 「結婚は彼にとって, ぞっとするような幻滅だった。完璧な結婚を彼は求めていたから」(Marriage was a ghastly disillusion to him, because he looked for perfect marriage. — *ibid*, p. 151.) と書いている。

ロレンスはこのような推断の根拠を述べていないし, また『マーディ』にも言及していないが, 彼の洞察はメルヴィルの私生活と私的心理の一面の真実を突いていると筆者は判断する。ただし, あくまで真実の一面あるいは一局面である。なぜなら, メルヴィルはさまざまなことに対してアンビヴァラントな気持ちを抱いており, 彼の諸作品中には, 自然と文明, 理想と現実, 正と不正, 美德と悪徳, 善と悪などの間での葛藤が描かれているからであり, 当然, 彼の私生活や私の内面においても葛藤する心理はあったであろうと推察できるからである。

真実とは何か? について, メルヴィルは『マーディ』の中で次のように3回言及している。

1回目は, 同じ島に派遣された2人の使者の報告内容と持ち帰った標本が異なり, どちらが真実か分からず当惑するという挿話である。ジュアム (Juam) 島から外へ出ることができないドンジャロロ (Donjalolo) 王は2人1組の使者たちを島外へ送り出して外界の情報を集めるが, 2人の使者の報告内容は異なり, 同じサンゴ礁からそれぞれが持ち帰ったサンゴの標本も異なり, 1人は深紅色のサンゴを, もう1人は白化したサンゴを持ち

帰った。どちらが真実か分からず絶望するドンジャロロ王を傍観していた哲学者ババランジャが「ラフォナ島のこのリーフを見たことがあるが, いろんな所でいろんな色をしている。ズマとヴァーノピについては, 両方とも間違いで, 両方とも正しい」(I have seen this same reef at Rafona. In various places, it is of various hues. As for Zuma and Varnopi, both are wrong, and both are right. — *Mardi*, Ch. 82, p. 250.) と語って, この挿話は終わる。この挿話は, 真実は個々人の視点により異なるということを寓意している。

2回目は, 真実とは何か? についての対話である。哲学者ババランジャが「見えるものは目の気まぐれにすぎない」(things visible are but conceits of the eye — *ibid*, Ch. 93, pp. 283-284.) と言うと, 歴史家モヒ (Mohi) は「もしすべてのものが欺瞞なら, 何が真実だ?」(if all things are deceptive, tell us what is truth? — *ibid*, Ch. 93, p. 284.) と問う。するとババランジャは「古の問いだ。その問いが発せられたのは世界の始まりの時ではなかったか? しかし, もう問うな。その問い自体がどんな答えよりも究極のものだ」(The old interrogatory; did they not ask it when the world began? But ask it no more... that question is more final than any answer. — *ibid*.) と答えて, 真実とは常に探求し続けるものであると仄めかす。

3回目は, 「無知なほどよい」(The more ignorant the better. — *ibid*, Ch. 115, p. 355.) と言ってババランジャが語るベンガルボダイジュ (banian tree) と9人の盲人の寓話である。千本の枝が地中に突き刺さっていて, 本来の幹がどれだか分からなくなっているベンガルボダイジュの巨木を9人の盲人が取り囲み, それぞれが最初に触れた枝を本来の唯一の幹だと主張する。つまり, 各人がそれぞれの錯誤を唯一の真実だと主張する。

メルヴィルのフィクションを読んで, 彼の私生活や私的心理を推量するのは, 盲人がベンガルボダイジュの巨木に触れるのと同じような行為なのではないだろうか?

10) *The Letters of Herman Melville*, pp. 70-71. [] 内の語は編者が補ったもの。

参考文献

- Anderson, C. R. *Melville in the South Seas*. New York: Dover Publications, 1966.
- Arvin, Newton. *Herman Melville*. New York: The Viking Press, 1950.
- Auden, W. H. *The Enchafèd Flood, or The Romantic Iconography of the Sea*. New York: Vintage Books, 1950.
- Braswell, William. *Melville's Religious Thought: An Essay in Interpretation*. New York: Octagon Books, 1973.
- Chase, Richard. *The American Novel and Its Tradition*. New York: Doubleday Anchor Books, 1957.
- Davis, Merrell R. *Melville's Mardi: A Chartless Voyage*. Hamden, Conn.: Archon Books, 1967.
- Davis, Merrell R. and Gilman, William H., eds. *The Letters*

- of *Herman Melville*. New Haven: Yale University Press, 1960.
- Dryden, Edgar A. *Melville's Thematics of Form: The Great Art of Telling the Truth*. Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1968.
- Feidelson, Charles, Jr. *Symbolism and American Literature*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1953.
- Fiedler, Leslie A. *Love and Death in the American Novel (Revised Edition)*. New York: Dell Publishing Co., Inc., 1966.
- Gale, Robert L. *Plots and Characters in the Fiction and Narrative Poetry of Herman Melville*. Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1972.
- 林 信行『メルヴィル研究』東京: 南雲堂, 1958.
- Lawrence, D. H. *Studies in Classic American Literature*. Penguin Books, 1971.
- Leyda, Jay, ed. *The Melville Log*. New York: Gordian Press, 1969.
- Mason, Ronald. *The Spirit Above the Dust: A Study of Herman Melville*. Mamaroneck, N.Y.: Paul P. Appel, Publisher, 1972.
- Matthiessen, F. O. *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. New York: Oxford University Press, 1941.
- Metcalf, Eleanor Melville. *Herman Melville: Cycle and Epicycle*. Westport, Conn.: Greenwood Press, Publishers, 1970.
- Parker, Hershel, ed. *The Recognition of Herman Melville: Selected Criticism Since 1846*. The University of Michigan Press, Ann Arbor Paperbacks, 1970.
- Porte, Joel. *The Romance in America: Studies in Cooper, Poe, Hawthorne, Melville, and James*. Middletown, Conn.: Wesleyan University Press, 1969.
- Rollyson, C. and Paddock, L. *Herman Melville A to Z: The Essential Reference to His Life and Work*. New York: Checkmark Books, 2001.
- 酒本雅之『砂漠の海—メルヴィルを読む』東京: 研究社, 1985.
- Scribner, David, ed. *Aspects of Melville*. Pittsfield, Mass.: Berkshire County Historical Society at Arrowhead, 2001.
- 曾我部学『ハーマン・メルヴィル研究』東京: 北星堂書店, 1972.
- Stern, Milton R. *The Fine Hammered Steel of Herman Melville*. Urbana, Chicago, and London: University of Illinois Press, 1968.
- Thompson, Lawrance. *Melville's Quarrel with God*. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1952.
- Wadlington, Warwick. *The Confidence Game in American Literature*. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1975.
- Weaver, Raymond M. *Herman Melville: Mariner and Mystic*. New York: Cooper Square Publishers, Inc., 1968.

要 旨

太平洋での放浪経験と合わせて、メルヴィルの結婚が第3作『マーディ』の背景となった。『マーディ』は彼の全著作中で最も長い作品で、架空のプロット、登場人物、場面には寓意的・象徴的意味が宿されている。作者の結婚がこの寓意ロマンスのテーマの素材となり、主人公は失われた理想の純潔をむなしく探求する。